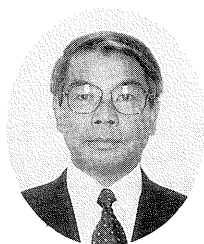


卷頭言



筑紫平野を眺めながら

(財) 日本植物調節剤研究協会 評議員
(財) 日本植物調節剤研究協会 九州支部長

平川孝行

久し振りの秋晴れを見計らって、福岡市の南東部に位置する宝満山（869m）に登りました。山頂から南を見ると、眼下には筑紫平野が広々と拡がっており、その中を九州最大の大河、筑後川が大きくうねりながら佐賀県に沿って有明海までゆったりと流れています。今、筑紫平野では黄金色に輝いて水稻が収穫を待っています。

福岡空港の近くに見える板付遺跡から、縄文時代晩期の土器とともに水田跡が発掘されています。2500年も前に北部九州では我が国で最も早く稲作が始まり、その稲作技術はやがて全国へ伝播されていきました。時代は下って、明治20年～30年代にかけては、乾田馬耕と新しい稲作技術を組み合わせた「福岡農法」が、北陸、東北地方を始め全国に広められていきました。

戦後の食糧増産の時代、九州地域には優れた水稻品種が無く、収量は低迷していました。農林省九州農業試験場では、筑後地方在来種の短稈種「十石」の遺伝子を導入した育種が精力的に進められ、昭和30年代後半からホウヨク、コクマサリ、シラヌイ、レイホウ等の短稈・多収品種が次々に誕生し普及しました。その結果、九州地域の水稲の単収は飛躍的に向上し、佐賀県は、昭和40年、41年2年連続で米作単収日本一となり、生産性の高い組織的な生産体制は「新佐賀段階」と呼ばれ、全国の農業関係者の注目を集めました。

昭和50年代半ばになると、国民一人当たりの米消費量の減少が一段と進み、消費者は食味の優れた米を選ぶ傾向が強くなるとともに、九州の米は不味いという不名誉な評価が定着していました。名誉挽回をねらって平成元年に育成されたヒノヒカリは食味が優れた品種で、九州

を中心に西日本に栽培が拡がり、現在、栽培面積は15万 ha に迫っています。

筑紫平野では、先人、先輩のたゆまない努力によって生まれた農業技術を受け継ぎ、改善を重ねながら、米麦作を中心に、大豆、野菜なども取り入れて、新品種の導入、栽培技術や作業体系の改善、生産基盤の整備などが積極的に進められ、食糧増産という国の要請や、高度化する消費者ニーズに応じて食料生産への努力がつけられてきました。

しかし、この豊かな穀倉地帯も未だかつてない転換期を迎えています。農業従事者の減少、高齢化が進み、後継者確保の難しさは他の地域と変わりありません。担い手の確保が急がれます。WTO農業交渉では国境措置や、国内支持に対する国際規律の強化が論議されており、中長期的には貿易自由化の流れが加速化されるものと思われ、国際化に耐えうる農業競争力への強化が今まで以上に重要になります。また、我が国を循環型社会へ転換するという大きな流れの中で、農業も環境保全を重視したものに転換していく必要があります。より高いレベルでの環境負荷の低減が必要となるでしょう。さらに、国民の食の安全性に対する信頼は揺らいでおり、信頼回復を図ると共に、消費者に選択される農産物を生産することが今まで以上に重要となります。

我が国の食糧基地と位置づけられている九州農業・農村が、食料自給率向上に貢献しつつ、次の百年も持続・発展していけるよう、国民の理解を得ながら、関係者が一体となって叡智を絞り努力を重ねていかなければならない思いを強くしています。